

清水崑作品に表現された長崎への郷愁

―長崎での個展及び時代物作品に見られる影響―

入江 清佳

はじめに

長崎市出身の清水崑（一九二〇―一九七四）は、昭和期に活躍した漫画家で、同時代に大人漫画の中心的な団体であった漫画集団の初期の団員である。人間社会に通じるかっぱの社会をユーモアとペーソスによって描いた一連のかっぱ漫画、戦後の政治と社会を風刺した政治漫画、著名人に取材を行い似顔絵と文章を描くルポ漫画など多種多様な漫画作品で活躍した。特に、昭和二六年（一九五二）から始まる一連のかっぱ漫画は社会現象となり、黄桜酒造やカルビー製菓株式会社、東京都民の日のバッジなどのキャラクターに採用され、映画や舞台、テレビなどでのメディアミックスも盛んにおこなわれた代表作である。また、その文人画風の柔らかな毛筆の線とユーモアのある作風は文学者を中心に文化人にも愛された。川端康成は清水の作風について「あいたいとして広潤、温暖にして爽涼、無礙にして新鮮」と述べ文人画の大家池大雅にも通じると評している¹。『かっぱ川太郎』はテレビ連続漫画として日本放送協会（以下「NHK」とする）で連続放送され、株式会社日本映画社が制作したニュース映画「日本ニュース」では政治のニュースにあわせて清水が政治漫画を描く様を映すなど、映像メディアの黎明期に取り上げられている²。しかしながら、清水の死後約五〇年が経過し、業績が過去のものとなりつつあることは否めない。このことから、長崎市

では、清水の研究を進めることでその業績を風化させず漫画史及び戦後の文化史、長崎学の中に位置づけるため、令和四年度（二〇二二）から収蔵する清水崑マンガ原画等資料について、資料のデジタル化、目録への情報追加、資料収集を行い、研究及び資料整理を進めてきた。

清水に関する研究については、清水の画業について詳細にまとめたものは見当たらないものの、佐藤忠男と尾崎秀樹の評論が画業の全体像と漫画の評価を端的にまとめるとともに、須山計一や飯沢匡が昭和期までの主だった漫画家を紹介する中に清水が含まれている³。他方、漫画の通史を記した石子順、石子順三、清水勲、峯島正行の著作に漫画集団の一員として名前が見られ、石子順は政治漫画、峯島は清水の仕事全般に触れた上でかっぱ漫画に言及している⁴。長崎での清水の活動については、長崎の美術評論家である阿野露団が活動の経過と言説をまとめている⁵。また、近年の研究として、高橋浩一郎がテレビアニメの源流の一つとして『かっぱ川太郎』のテレビ漫画連載についての論考をまとめている⁶。以上から、清水に関する研究については、評論、作品研究としてまとめられたものはあるものの、作家、作品共に研究は途上にあると言える。

清水の活動は東京中心であり、一九歳で上京して以降長崎との繋がりは地方紙や雑誌に漫画や言説の掲載が見られるものの数は多くはない。しかし、漫画や言説を分析すると清水が長崎をどのように思っていたのか、また当地が清水に与えた影響を指摘することができる。このことを踏まえ、本稿では現在までの調査で明らかになった、清水崑マンガ原画等資料について概要を述べた上で、清水が晩年の昭和四六年（一九七二）から昭和四七年（一九七三）にかけて長崎で開催した年中行事に関する三回の個展（以下「三回の個展」

と言う。)の経過を説明し、その上で清水と長崎の繋がり及び長崎が作品に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

一 長崎市所蔵清水崑マンガ原画等資料について

(一) 漫画家清水崑とその仕事

本節では、資料の説明に入る前に、清水崑の経歴と漫画家としての業績を押さえていく。清水崑は、大正元年(一九一二)長崎県長崎市銭座町(現在の長崎県長崎市天神町)に生まれた。清水崑はペンネームで本名は清水幸雄と言う。早くに両親を亡くしており、父方の祖父母に育てられた。昭和十三年(一九三八)長崎市立商業学校(以下「商業学校」と言う。)に進学し、ここで岡本一平の作品に衝撃を受け、絵を描くようになる。一九歳の時に東京の美術学校を目指し家出同然で上京し、商業学校時代の友人宅で同居を始め、路上の夜店で似顔絵描きなどをして貧乏暮らしを二年程経験した。その後、文藝春秋の編集者であった桔梗利一から、吉川英治の随筆に挿絵を描く仕事の依頼があり、これが漫画家としてのキャリアのスタートとなる。昭和八年(一九三三)には、漫画家の吉田貫三郎から前年に若手漫画家が結成した新漫画派集団に参加しないかと誘いを受け、同団体に所属する。戦前の仕事で特筆すべきものとしては『新青年』に連載した「東京一夜物語」が現在の日活株式会社で映画化されたことが挙げられる。昭和十三年(一九三八)に、南満州鉄道から新漫画派集団員五名が招集され取材旅行を行い、翌年には、当時南支派遣報道部軍曹であった小説家の中野実から戦地の様子を聞き、同報道部派遣を志願する。この時期について清水は、仕事をしては飲みまわる生活を繰り返し、満たされない思いを抱え

ており、自身を律する派遣であったと述べている⁸。この従軍中に、宣撫班の隣の班にいた火野葦平と出会う。この縁もあり、戦後に火野の『河童』という作品の挿絵を描いたことが、清水の代名詞となるかっぱ漫画に繋がることとなる¹⁰。

派遣から戻ると友人の芥川賞作家中山義秀の仲人で、山本健吉の義理の妹で歌人の石橋恒子と見合い結婚し、鎌倉で新婚生活をはじめ。当時の鎌倉には、著名な文学者たちが多く在住しており、彼らは鎌倉文士と呼ばれた。漫画家は小説や随筆などに挿絵を描き、本の装丁を担当するなど関係が深く、特に清水は文人風の画風が文学者等から高く評価された。清水は、文学者たちと親しく交友しており、酒を酌み交わし時には旅行を共にする仲間もいた¹¹。

昭和十三年に「国家総動員法」の施行により、漫画家も戦争協力の要請を受けるようになる。昭和十五年(一九四〇)には、新漫画派集団を中心に複数の漫画団体が集合し「新日本漫画協会」が結成される。同年一月には機関誌『漫画』が創刊され、清水の漫画も掲載される。翌年には日米開戦となり、一層の国策協力を求められるようになる。昭和十八年(一九四三)「日本漫画報公会」が結成され戦意高揚を目的とした漫画、紙芝居の制作、国策に沿った展覧会の開催、地方農村や軍需工場への慰問活動が行われる。この中で、『読売新聞』昭和十八年一月一五日に清水を含む漫画家二〇人が増産農村へ漫画慰問を行う旨が書かれている¹²。戦時体制下では、様々な芸術家が国策協力を求められたのと同様に漫画家たちもまた歯車に組み込まれていくこととなる。

昭和二〇年(一九四五)に終戦を迎えると、翌年に創刊された『新夕刊』という新聞に政治漫画を描くようになる。これは、友人であった、文芸評論家の小林秀雄に声をかけられたもので、当初は政治漫

画が最も不得手であると辞退したという¹³。しかし、描きだすと好評となり、『朝日新聞』から執筆の引き抜きがあった¹⁴。昭和二二年（一九四七）には、『朝日新聞』に漫画を描くようになり、特に昭和二四年（一九四九）一月三〇日に『朝日新聞夕刊』が創刊となると連日一面に政治漫画が掲載され看板漫画家となる¹⁵。政治漫画の執筆は、昭和二〇年代に特に盛んだったが、簡略化された線と強烈な風刺で注目された横山泰三が『朝日新聞』で「社会戯評」の連載を開始すると徐々に量が減り、著名人のルポ漫画の連載や新聞小説の挿絵などに移行、晩年は似顔絵が中心となる¹⁶。

戦後、清水の代名詞となったのは、一連のかっぱ漫画で、その始まりは昭和二六年（一九五一）に『小学生朝日新聞』に連載された『かっぱ川太郎』であった。昭和二八年（一九五三）からは『週刊朝日』で『かっぱ天国』の連載がはじまり、これが大人向けに大ヒットする。更に『かっぱ川太郎』は昭和二九年（一九五四）二月四日から昭和三一年（一九五六）七月三一日までNHKでテレビ連続漫画として全八六一回が放送された¹⁷。昭和三〇年（一九五五）には『かっぱ川太郎』がアニメ映画化、昭和三一年には「かっぱの姫君」が宝塚でレビューとなるなど、清水崑のかっぱは世代を超えて広く知られるようになる。この人気から、カルビー製菓株式会社の「かっぱえびせん」の前進である「かっぱあられ」のキャラクターや黄桜酒造の親子かっぱのCM、更に東京都民の日のバッジへ長年採用されるなど人々に愛された。かっぱ漫画は昭和三〇年代に本格化するマンガブームに重なって流行し、息長く雑誌などに登場している。

この他、清水は小説、随筆の挿絵に装幀、似顔絵と文章を用いた著名人のルポ漫画、絵本の制作に名菓の包装紙のデザイン、舞台美術や装置の担当、晩年には絵画作品として河童や肖像画を描き個展

も開催している。また、昭和二八年頃から戦国時代の雑兵や『太閤記』、『水滸伝』をモチーフにした漫画や絵物語など、歴史物の作品が目立つようになる。子ども漫画については、河童の他にのんびり屋の男の子やペンギンなどが主人公の作品がある。以上からも清水の業績として特に「かっぱ漫画」「政治漫画」が挙げられるものの、執筆活動は多種多様で全貌については、さらなる調査が必要である。

長崎での活動としては、昭和四六年から四七年にかけて、長崎の年中行事をかっぱが遊ぶというテーマで三回の個展を開催し、ライフワークと位置付けている。この個展は、商業学校時代の同級生など長崎人の協力の上で実施された。その後、協力者の一人で東濱町自治会長を務める田中直一から同町の長崎くんちにおける新たな演し物のデザインを依頼される。こうして、昭和四九年（一九七四）の長崎くんちで初奉納されたのが、清水デザインの「竜宮船」であった。しかし、清水は同年三月に急逝したため、初披露された竜宮船を見ることは叶わず、恒子夫人が初奉納を見届けている。その後、平成一三年（二〇〇一）十一月一日に清水の遺族から寄贈された原画等資料を広く公開するため長崎市は清水崑展示館を開館した。

（二）清水崑マンガ原画等資料概要

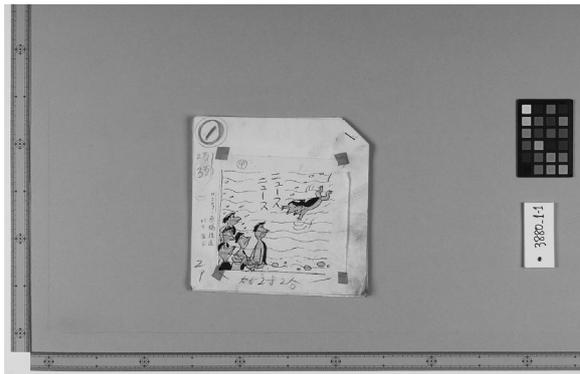
長崎市の所蔵する清水崑マンガ原画等資料（以下「長崎市所蔵資料」と言う）は、清水崑遺族から寄贈を受けた資料が基礎となっている。その後も遺族並びに関係者から寄贈があり、現在では三、七〇四件が収蔵されている。また長崎市所蔵資料台帳については、近年の調査を基に整理を行い、長崎市長崎学研究所HPにて公開・更新を行っている¹⁸。なお、清水の資料は複数のミュージアムが収蔵しており、東京都江戸東京博物館にも遺族から寄贈された資料群が

ある。朝日新聞で人気を博した政治漫画などは、元内閣総理大臣吉田茂の登場部分を清水から吉田に贈呈しており、現在は外交史料館別館（吉田茂記念館）に収蔵されている。

長崎市所蔵資料の特徴としては、『かっぱ川太郎』、『かっぱ天国』、『朝日新聞掲載の政治漫画や似顔絵という代表的な仕事の原画が残されている点にある。また、長崎に関連する資料として、三回の個展で制作された絵画や屏風資料も収蔵されているのも特色の一つと言えるだろう。以上の主だった資料群について、詳しく見ていきたい。

（1）『かっぱ川太郎』原画資料

『小学生朝日新聞』に昭和二六年から連載された『かっぱ川太郎』



【図1】『かっぱ川太郎』原画（『小学生朝日新聞』連載）、昭和26年頃、墨、和紙、16.0×20.0cm、清水崑展示館



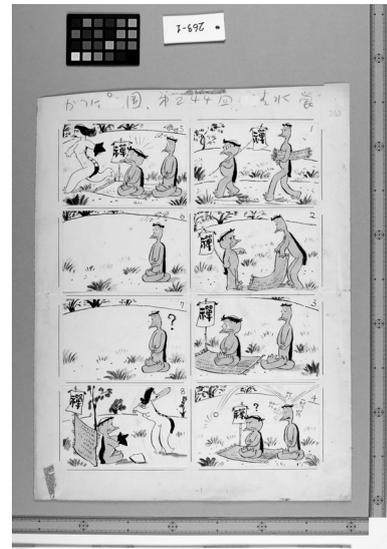
【図2】『かっぱ川太郎』原画（NHKテレビ連続漫画）、昭和29～31年、墨、和紙、27.8×39.8cm、清水崑展示館



【図3】『かっぱ川太郎』原画（『婦人公論』掲載）、昭和33年、墨、和紙、ケント紙、38.5×27.0cm、清水崑展示館

は、一連のかっぱ漫画の始まりの作品である【図1】。その後、昭和二九年二月四日から昭和三十一年七月三十一日までNHKのテレビ連続漫画として全八六一回がテレビで連載されており、雑誌や新聞ではなくテレビで漫画の連載が行われたのは、珍しい形式であったと言えるだろう【図2】。テレビ連続漫画は、一分間にマンガ原画四枚が順番にめくられ、これに合わせて場面に合った音楽が流れるというものであった¹⁹。更に『かっぱ川太郎』は『婦人公論』昭和二九年一月号から昭和三十三年（一九五八）一二月号まで五年間掲載され【図3】、その後も掲載誌を変えながら管見の限り昭和四四年（一九六九）九月発売の『三年の学習』まで掲載が確認できる²⁰。長崎市所蔵資料には、『小学生朝日新聞』の原画が四七件、NHK放送版の原画が一、

四〇四件、『婦人公論』の原画が四〇件あり、その他カットなどが六〇件ある。『小学生朝日新聞』の原画は最大で縦二〇・〇cm、横二〇・〇cm、最小で縦一〇・〇cm、横一・〇cmとなっている。元は九コマの漫画であったものがコマ毎に切られて紙に貼られ、こよ



【図4】『かっぱ天国』原画
 (『週刊朝日』掲載)、
 昭和32年、墨、和紙、ケント紙、
 45.5 × 35.6cm、清水崑展示館

りやホッチキスなどでまとめられた状態となっている。NHK版の原画は最大で縦三〇・五cm、横四三・〇cm、最小で縦二三・〇cm、横二〇・八cmとなっている。一コマが一枚の紙に描かれ四枚で完結する形式がほとんどである。長崎市所蔵資料としては四コマの各一枚を一件とカウントしている。『婦人公論』は最大で縦五四・〇cm、横五七・〇cm、最小で縦二二・五cm、横二四・〇cmとなっており、一部原稿が分割されているため大きさに差がある。一枚五コマから六コマとなっており、二ページで完結する形式となっている。

(2) 『かっぱ天国』原画資料

『かっぱ天国』は昭和二八年から昭和三二(一九五七)年一二月二九日にかけて『週刊朝日』にて全二五七回が連載された。本作は子ども河童の生活を描いた『かっぱ川太郎』に対し、大人河童の社会を描いており、その不条理さをユーモアとペーソスをもって表現したことで大ヒットし、清水のかっぱ漫画が広く世に知られるきっかけとなった。長崎市所蔵資料の『かっぱ天国』原画は一六五件あ



【図5】「復縁談判」(『朝日新聞夕刊』掲載)、
 昭和25年、墨、和紙、20.0 × 26.5cm、
 清水崑展示館



【図6】『子守の合唱』(『朝日新聞』掲載)、
 昭和30年、墨、和紙、ケント紙、
 27.5 × 38.5cm、清水崑展示館

る【図4】。原画のサイズは最大縦七九・〇cm、横六七・五cm、最小縦四六・〇cm、横一六・五cmである。これは、一部原稿が分割、貼り付けされるなどしているため大きさに差がある。コマ数は八コマ、一〇コマ、一二コマで、台紙にコマを割り、別の紙に描いた絵を貼り付け原稿が制作されている。

(3) 朝日新聞掲載資料

朝日新聞掲載資料は、大きく政治漫画と著名人にインタビューを行うルポ漫画、かっぱ漫画『子守の合唱』、似顔絵の原稿に分かれる。この他、記事の題字やカットなどの細かな原稿も見られる。サイズも大きささまざまで形態も紙を切り抜いたものや原稿を継ぎ足したようなものも多い【図5】。長崎市所蔵資料の中に含まれる朝日新聞掲載資料については、現在整理途中のため、ここではこの一部であ

る『子守の合唱』の原稿についてのみ記し、政治漫画及びルポ漫画等については今後の課題とした。『子守の合唱』は、朝日新聞の昭和三〇年（一九五五）六月一七日から九月二四日まで全一〇〇回が連載された。内容は、託児所の子守と子どもたち、子犬を探す犬とこの子犬と出会った河童の女の子、再会する姉妹の河童と複数の物語が同時に進行する【図6】。『かっぱ川太郎』に登場するキャラクターと造形が共通する河童がおり、同作品の一種とも考えられる。長崎市所蔵資料としては、八八点が収蔵されており「子守の合唱」の多くが長崎市にあることが分かる。原稿サイズは最大で縦二八・〇cm、横三九・五cm、最小で縦二〇・五cm、横三〇・二cmとなっている。一枚の厚紙に別に描いた四枚の絵が貼られており、厚紙部分は印刷の関係か上下左右に切り込み、切り取りや折り曲げた跡がある。コマ外に鉛筆もしくは赤鉛筆でタイトルの「子守の合唱」と各回の小題が付されているものも多い。ここまで、長崎市収蔵資料の中で主だった資料を紹介した。次章では、本稿で分析を行う長崎関係資料について、概要と制作過程を見ていく。

二、長崎での個展開催とその意図

(一) 長崎関係資料概要

本節では、長崎関係資料について詳細を述べる。前述のとおり、



【図7】《長崎の行事を遊ぶ河童展下絵（精霊船・竹ン芸・傘鉾）》、昭和55年、画用紙、和紙、水彩、ペン、鉛筆、二曲一双、147.5 × 147.0cm、清水崑展示館



【図8】《カッパ風あげ図》、昭和47年、水彩、画用紙、40.5 × 37.0cm、清水崑展示館

本資料群の大部分は、昭和四六年一〇月から昭和四七年一〇月まで長崎で実施された三回の個展に関連する資料である。この三回の個展は、長崎の年中行事と河童を組み合わせて描く事がテーマになっており、長崎くんちを中心にハタ揚げ、ペーロン、精霊船、鯉のぼり、鼠島の遠泳教室などの絵が見られる【図7】【図8】。長崎市所蔵資料としては、絵画が一点、屏風が六点、個展開催時の長崎くんちに関する座談会のテープが一点となっている（【表1】参照）。絵画は個展開催に向けた長崎での取材の際に描かれたスケッチと個展用に描き下ろされた作品に分けられ、一部の作品には制作された年月が記載されている。また、屏風はスケッチの絵を仕立てたもの

名称(第一分類)	員数	作者者共著者	寸法(縦)	寸法(横)	制作年	形状	種別(第一分類)	種別(第二分類)
絵画1[傘鉾行列]	1	清水崑	143.0	131.0	昭和46年10月1日	彩色	絵画	長崎関係資料
絵画2[精霊船]	1	清水崑	40.0	56.0	昭和47年4月	彩色	絵画	長崎関係資料
屏風1[ペーロン]	1	清水崑	120.0	118.0	昭和47年4月	彩色	屏風	長崎関係資料
絵画4[籠宮船]	1	清水崑	40.0	56.0	昭和46~47年	彩色	絵画	長崎関係資料
精霊船図	1	清水崑	62.5	96.0	昭和47年4月	彩色	絵画	長崎関係資料
オランダ万才図	1	清水崑	62.0	96.0	昭和46~47年	彩色	絵画	長崎関係資料
籠船図	1	清水崑	62.7	96.0	昭和46~47年	彩色	絵画	長崎関係資料
カッパ風あげ図	1	清水崑	37.5	46.0	昭和47年4月	彩色	絵画	長崎関係資料
カッパ風あげ図	1	清水崑	37.5	46.0	昭和47年5月	彩色	絵画	長崎関係資料
長崎の行事を遊ぶ河童展 下絵(風あげ)	1	清水崑	147.5	147.0	昭和55年	彩色	屏風	長崎関係資料
長崎の行事を遊ぶ河童展 下絵 (風あげ・ペーロン・鯉のぼり)	1	清水崑	147.5	147.0	昭和55年	彩色	屏風	長崎関係資料
長崎の行事を遊ぶ河童展 下絵 (精霊船・竹ン芸・傘鉾)	1	清水崑	147.5	147.0	昭和55年	彩色	屏風	長崎関係資料
長崎の行事を遊ぶ河童展 下絵(籠船)	1	清水崑	147.5	147.0	昭和55年	墨	屏風	長崎関係資料
長崎の行事を遊ぶ河童展 下絵 (オランダ万才・精霊流し・籠船)	1	清水崑	147.5	213.0	昭和55年	彩色	屏風	長崎関係資料
長崎くんち昭和46年秋 「話は踊る」	1	清水崑	20.0	20.0	昭和46年	/	木、テープ	長崎関係資料
くじらの潮吹き	1	清水崑	50.0	39.5	昭和46~47年	彩色	絵画	長崎関係資料

【表1】清水崑展示館所蔵長崎関係資料一覧

で、生前清水が絵を配置するところまでには行っているものの、清水の七回忌に恒子夫人と長男が完成させた。二曲一対の屏風四点は右隻裏に「昭和五十五年亡夫清水崑 七回忌為春供養 清水恒子」左隻裏には「贈呈 長崎市立博物館様」と揮毫があり、三曲一対屏風一点は長男の名が書かれている。資料のサイズ等は【表1】のとおりとなり、絵画は最大で一四三cm×一三二cmと大型のものから、四〇・五cm×三七・〇cmの小さなものまで収蔵している。屏風については概ね一四七・五cm×一四七cmだが、最大のもので一四七・五cm×二一三・〇cmの資料がある。

なお、三回の個展で制作された絵画等の作品は長崎の個人が所蔵しているものもあり、店舗や長崎くんちの庭見せにおいて展示されている。三回の個展を検討する上で、個人蔵の資料についても今後記録の必要性があると言えるだろう。

(二) 三回の個展開催と竜宮船デザインの経過

本節では、昭和四六年、四七年の三回の個展と、その後清水が取り組む東濱町の竜宮船デザインについて経過をまとめる。

長崎での個展開催の契機は、清水が商業学校の同級生である、田中直一に個展開催の相談をしたことに始まる。²¹清水の昭和四六年五月一二日の日記には「長崎の風景の行事」を河童で描くことを思いつき、単に長崎の風物詩と河童を描くのでなく、後々まで残る「長崎の絵」として描く「画期的なアイデア」としている。²²その後、田中が開催に協力する旨の連絡があり、時期は長崎くんちに合わせ、場所も田中の経営するタナカヤの店舗内にあるギャラリーに決まる。この時点で、全三回で完結させることは決めており、第一回を「長崎のくんちを遊ぶかつぱ展」(以下「かつぱ展」と言う。)と題し、

一〇月三日から九日までの開催としている。六月二四日には、長崎に取材と打合せに来崎しており、二七日まで滞在した。²³この時、田中と同じく商業学校の同級生で年中行事に造詣が深い谷口正行の案内で、長崎県立長崎図書館に足を運び長崎くんちの写真四〇〇枚を現像している。²⁴また、同館に長く在籍した郷土史家の永島正一、長崎くんちの奉納踊で龍踊を奉納する諏訪町の総監督山下誠に取材を行い、龍のスケッチをしている。更に八月一四日から一七日にかけて再度来崎し、土井首のペーロンと精霊流しを取材し、更に長崎県庁の招待で阿蘭陀万歳の衣装見学と山下の解説を受け、その後長崎くんちの映画を鑑賞している。九月に入ると連日くんち展に展示する作品の制作を行い、完成したものは順次長崎の山中表具屋、土井額縁屋に送付され、表装されていたようだ。九月一五日の日記には「終日のくんち展の絵画を描く。余念なし。」とあり、制作に打ち込んでいた様子が伝わってくる。九月二三日には、作品が全て完成し大小合わせて約四〇点を出品することとなった。その後、個展開催のため一〇月一日に帰崎し、一〇月三日から九日にかけてくんち展が実施され、盛況で幕を下ろす。なお、二日には、料亭一力にてかっぱが龍踊を行うくんち屏風を制作。六日に諏訪神社に奉納されている。

二回目の個展「長崎の春夏を遊ぶかっぱ展」(以下「春夏展」という)が開催されたのは、昭和四七年五月三日から八日までである。当初は四月末の予定であったが、清水が体調を崩し五月の連休に延長となった。展示の内容は、ハタ揚げ、ペーロン、精霊流し、鯉のぼりなどで個展名のとおり、長崎の春夏の年中行事が一堂に会する内容となっている。春夏展は前回以上に谷口が作品制作の手助けを行っており、連日にわたって年中行事に関する文献、使用する道具

や精霊船の寸法図、写真など大量の資料を清水に送付している。特に興味深いのは、長崎人を集めた「ハタ揚げ座談会」を開催し、これをテープに録音し清水に送付している点である。このことについて清水は、絵のモチーフになる話もあり有難いとしつつ「オレの仕事の材料というより、長崎の年中行事の記録(歴史)として「長崎の遺産」となる。その意味で貴重なり。谷口の別の手柄なり。」と昭和四七年二月六日の日記に書いている。²⁵長崎市出身とはいえず、活動の拠点が東京であった清水が、年中行事に関する道具を細部まで描くことができたのは、現地取材や関係者へのインタビューに加えて、谷口の資料提供であったことだと言える。他方、田中は展示を行うギャラリーの所有者であると同時にスケジュール管理など運営面のサポートを行っており、清水の個展開催は、長崎側の協力があつてのことであつたと言える。

この時期、清水は東京での仕事が多忙であり、写真や資料の整理は進めていたものの本格的に絵の制作に入ったのは三月一七日頃からであった。描く対象の形状を把握する「ディテールの採集」と呼ぶ作業を頻繁に行っており、資料から年中行事に関するハタや精霊船を抜き出して描いていたようだ。²⁶こうしてモチーフの理解を進めた上で四月八日の日記に「いよ／＼明日から「春夏展」と相俟む。(中略) 応接で屏風の大作から始める予定。」とあり、この頃から作品の制作が始まっている。²⁷ハタ揚げから取り掛かり精霊船、ペーロンの順で進めていき、全四六点が完成したのは、長崎に向う前日の四月二九日のことであった。同日の日記の中で清水は「くんち展」より四八点少い。が、内容の充実感と力感から言えば今回の方がずっと上」と作品に自信を示している。²⁸

「春夏展」は五月二日に招待客向けの茶話会(招待日)、翌三日か

ら八日までが一般向けの開催となっている。ここで注目したいのは三日に遠藤周作が来場している点である。清水はこの年の一月から遠藤のエッセイ『狐狸庵閑話』に挿絵を描いており、会食や手紙のやり取りなど交流が見られる。清水は遠藤の来崎について、掲載誌の『夕刊フジ』担当者から連絡を受けており、これを遠藤と交友のあった田中に伝えている。四月二六日の日記に田中が電話で「来なはるなら茶話会に飛入りしてもらお」と述べたと書かれている。この田中の提案は実現し、『長崎新聞』昭和四七年五月一〇日の記事によると、三日にタナカヤ主催の座談会が開催され、今回の個展、長崎の町、人、料理などについて遠藤と清水らが話をしていく。これらの経過から、書かれたのが『狐狸庵閑話』の最終回「清水崑画伯の個展」である。ここで遠藤は、清水の河童の絵に「サンタ・マリアのお像はどこという声が聞こえるような気がする。」と書いており、長崎の歴史と清水の絵を重ねて語っている。長崎を舞台にした作品で知られ、清水と共にエッセイの連載を行っていた遠藤が個展に来場し文章を残したことは、清水と文学者との繋がりを示す興味深い事例であり、また長崎展での特筆すべき出来事であったと言える。

三回目の個展「ふたたびくんちを遊ぶかっぱ展」（以下「完結展」と言う。）は、これまでの個展の集大成と位置付けられ、一〇月七日から一二日までNBCアートギャラリーで開催された。完結展は、早い段階からアイデアが練られており、例えば、五月一九日の日記に長崎の知人から、砂糖を使った長崎の伝統工芸「ぬくめ細工」でかっぱと年中行事の作品を作ってはどうかと提案され、清水はこれに「天から降ったようなアイデア!」と感心している。ぬくめ細工は当時長崎県の無形文化財に指定され、伝統技術保持者の松尾

玄次に協力を仰ぐこととなる。この時期に清水は、粘土を用いた彫像制作を行っており、ぬくめ細工の制作においても自身で彫像を作り、これを元に松尾に制作を依頼している。作品の制作については、前回は引き続き、谷口から連日資料の送付が見られる。特に長崎くんちのポジフィルムは良い写真がそろっており、「財産」になる。いい絵になる。」と書いており、作品の参考としたことがわかる。九月五日にディテールアップを開始し、一九日には本描きに入り、来崎後の一〇月五日に直接中山表具店に表装を持ち込むまで作品を描く熱心さであった。絵画作品の他にぬくめ細工、多治見焼絵皿、色紙、扇面などが展示された。また、個展初日には長崎放送の依頼で永島と共に長崎くんちの解説を行っている。以上が三回の個展の経過となる。清水のアイデアから始まった長崎での個展は、現地での取材に加え、田中や谷口など長崎側の協力者の運営や資料提供があつてこそ実現したことがわかる。

三回の個展後も清水の長崎での仕事は続くこととなる。昭和四八年（一九七三）八月五日に田中が上京し、昭和四九年の長崎くんちにて初奉納となる竜宮船のデザインについて清水に相談を行う。この日の日記にはすでに素案が書かれており、船体には「崇福寺の赤門をそっくり用いる」と完成したものは異なるアイデアも見られる。なお、清水への相談以前に長崎くんちに造詣が深く、三回の個展でも清水に協力していた山下、谷口、歴史に関しては永島がアドバイザーとしてこの企画に関わっていた。清水は九月一四日から一六日まで長崎に滞在し田中、東濱町の石丸、山下、谷口などと構想を話し合い、一〇月三日から五日には竜宮船のデザインを連日自宅で行っている。この年の一〇月六日から漫画集団団員一六人が長崎に滞在し長崎くんちを見物したが、清水は他の団員より長く滞在

し、田中など関係者と竜宮船の打合せを行っている。その後もやり取りは続き、船体と布部分について京都の木村新造商店の職人に相談し、竜の頭と尾は山下が博多に頼むということになる。昭和四九年の一月二〇日から二一日まで清水は田中、谷口、山下などと京都の木村新造商店に赴き、原寸大の船図を見て議論を行っている。二月に再度京都に行く予定だったが、三月に延期となり、日記の記録もここまでとなる。清水はこの年の三月一三日に倒れ二七日に死去し、長崎くんちでの竜宮船初奉納を見ることはなかった。しかし、昭和四九年一〇月七日の長崎新聞には「崑さんの竜踊る 人気さう東濱町竜宮船」との見出しで、妻の恒子など遺族が奉納踊りを見届けたと記事がある⁴⁰。清水の最後の作品と言える竜宮船は初奉納から現在まで特別出演含めて八回の奉納が行われている。

(三) 三回の個展開催における意図と意義

本節では、三回の個展開催の意図を日記に残された文章から明らかにする。清水は、長崎での個展開催を思いついた昭和四六年五月一二日の日記に次のように書いている。

食後、長崎の田中直君へ長文の手紙を書き速達で出す。内容はタナカヤでオレの個展をやらなにかというもの。それも「長崎の四季の行事」をカッパで描くというもの。その上、単なる「風物詩カッパ長崎」ではなくこれを決定的な「長崎の絵」という後々まで残そうという意図なり。

画集絵ハガキ、録画、織物、その他あらゆるものに応用、活用する。博物館か市役所で買い上げて観光用にするもよし。田中の返事が待たれる。必ずオドロクと思う。タナカヤの会場が手狭な

ら他に然るべき会場もあろう。画期的なアイデアなり。⁴¹（傍線は筆者による。）

この文章から、長崎での三回の個展が、ただ単に自身の人気キョラクターである河童を長崎の年中行事に組込む作品を作るのではなく、「決定的な「長崎の絵」」を当地に残そうと考えて実施されていたことが分かる。この構想は前節で見た通り個展という面では無事達成された。しかし、長崎に後々も残る作品を制作するという面では必ずしも満足いく結果ではなかったようだ。次に長崎での個展を振り返った、昭和四七年一〇月二〇日の日記を見ていく。

三回にわたる個展のそもそもの発想はカッパ他による長崎行事のオレの絵が画集となりポスターとなり絵葉書となり原画は市なり県なりが買上げて随時長崎の人々の目を楽しませるといふところにあつた。（中略）が、表向きの言いはいわゆる「長崎の文化のため」「文化財としてのこす」「これの出来る画人はオレを措いて他にない」「一世一代の壮拳」というまことに景気のいい、立派な看板で田中直ちもそれに異常なまでの感応を示して賛同し協力した。

ところが前後三回のちょうど真ん中の二回目あたりから画集にも図録にも絵ハガキにもならずただ単にオレの描いた長崎の絵をそれを好だ個人がそれぞればらに買い、或る人は秘蔵して人に見せず個展が済めば何事も起らなかった以前に戻りわづかに会場でオレの絵を見た人たちの記憶にとどまるだけという。買った人は買い得。見た人の見得、描いたオレの描き得（収入と上達）だけが残るといふ、結果となった。（中略）オレとし

てもこんどの三回の個展が自分の「描き得」の他に長崎のため
にどのような役立ち方をしたか、今のところ見当がつかぬ。こ
れは時間をかけて永い目で見ると他はない。ただ一つ深湯氏
の発議による(らしい)「長崎県立美術館に清水さんの絵を一、
二点所蔵したい」という新しい希望が若し形となって実現すれ
ば、今度の個展がもたらした唯一の「長崎への寄与」となる。
しかし、このことの持つ意義の重さや深さがどれほどのもの
なるかこれ亦「時」の審判を得ないと分からない。ただ、そ
ういう発議が疑いもなく湧いたという一事には不自然さはない。
あと、残る予算査定の問題を除けば長崎の誰が聞いても「当然」
とするところまで、おれの絵業が長崎人の感覚の心性に浸透し
たことは確かといえる。⁴²

ここから、長崎の文化に残る作品制作を清水が目指し、それがで
きるの自分しかいないという意気込みがあったことが分かる。し
かし、後半の文章では、見込みが外れ、作品の購入者、観覧者、清
水本人の買い得、見得、描き得にしかならなかったと述べており、
想定通りに事が運ばなかったと考えていたことが示唆される。他方、
長崎県立美術館での作品収蔵の話題もあり、このことを含めて
時間の経過が三回の個展の意義を示し、自身の作品が長崎に残るこ
とを期待していたようだ。
次に、注目したいのは長崎での個展が清水の画業に与えた影響で
ある。

絵は間違いなく上達した。刊行物のみを相手の従来の描法のマ
ンネリ化を排する上にはかり知れぬ力をもたらした。オレの内は

新しいオレが生まれている。数日前、漫画アイディアセンタを介
して注文をうけた「實業之世界」の人物(似顔)画(表紙カラー)
も画用紙にパステルで現場即字するというフイと浮んで着想も又
その可能性の確かさもこんど個展で磨いた新しい画技あつてのこ
とだ。大きな絵を描くことへの怖れも完全になくなっている。こ
れが「描き得」と言う所以である。⁴³

ここから、清水が言う「描き得」は自身の絵の上達のことであり、
更に具体的に自身の仕事のアイディア面、技術面で向上が見られる
と述べている。このことは、「春夏展」での長崎新聞の記事でも触
れられている。

今までのボクの絵は枯淡とか脱俗とかいわれ、自分自身も多少
その気になって、孤高をもつていさぎよしとするところがあつ
た。ところが昨秋、クンチに遊ぶカップ展の連作を思い切りマ
ンネリズムのキヅナから脱却して、赤ん坊のような無垢(むく)
な絵を描くことに努めた。それがどうやら、日本昔からに遠曆開
眼に通じたような世界が、目の前にひらけてくるキツカケとなつ
たようです。自分の使い慣れたメソッドとか、アイデア。それを
描き続けるイージーゴーイングの気持ち奇麗サッパリ消えうせ
てしまった。そして新しい無垢の世界と取り組んでみる勇気がぼ
つ然とわき起こった。⁴⁴

長崎での個展は、絵の上達とともにマンネリ化していた清水の創
作に新たな境地を開かせたことを示している。これを清水は無垢の
世界に取り組むと評しており、定型化した描き方を改めるきっかけ

となった点、また、個展での制作での経験が現場での即書きの発想や絵の上達の自信につながっている点で、清水の画業においても三回の個展は一つの転機であったと考えられる。

二 絵物語に描かれた長崎

(一) 創作の場としての長崎

前章では三回の個展について、経過と清水の開催意図を分析した。これを踏まえ、本章では長崎の文化に残る作品を制作するという考えに至った経緯を清水の過去の漫画、文章から明らかにしていきたい。このため本節ではまず、長崎が芸術家の創作の場として独自の背景を持つ土地であることを確認する。

長崎は、近世、所謂鎖国政策の中で中国とオランダに開かれた唯一公式の貿易港だった事で知られる。このことから、海外の貿易品が身近にあり、多くの人々は貿易に携わる仕事をしていた。また、オランダ人は出島に、唐人は唐人屋敷に逗留しており、後者は、出身地ごとに帰依する寺院があり、その色彩から赤寺とも呼ばれた。幕末には外国人居留地が置かれ、教会や領事館、居住のための洋館などが建設され、洋風の街並みが作られるなど、長崎には他都市にはない景観が作られる事となる。更に、年中行事や食、工芸など文化面にも中国やオランダの影響が見られる。このような独特の雰囲気から長崎は度々「エキゾチック」「異国情緒」「詩情の町」と評され、多くの芸術家を惹きつけることとなる。長崎を舞台に創作を行った芸術家については文学者や画家が知られる。⁴⁵ 前述のとおり、清水は長崎で取材や資料収集を行っており、このような制作手法は文学者に近似することから、ここでは文学者の長崎での活動を見ていく。

長崎往来の文学者については、長崎県立長崎図書館のホームページに明治二〇年（一八八七）から平成二三年（二〇一一）までの長崎出身・在住作家、長崎を題材とした作品二〇三点が掲載されている。⁴⁶ これは、小説を数えたもので随筆や詩などを含めると更にその数は増加する。長崎県立長崎図書館は、長崎を往来する芸術家が資料調査に度々訪れた場所として知られ、同図書館には大正八年（一九一九）から現在までに延べ約六、〇〇〇人が記帳した芳名録があり、この中には、芥川龍之介や菊池寛、大佛次郎などが含まれる。⁴⁷ また、昭和五九年（一九八四）発行の『長崎県大百科事典』には「長崎を訪れた作家たち」という項目があり、概略と主だった長崎の往来者四〇人の名前が挙げられている。⁴⁸ 「過去から現在までの長崎県のすべての事象を集大成した」とされる、同著作にこのような項目があるのは、長崎在住者にとって文学者の往来がよく知られた出来事であった事が示唆される。⁴⁹

明治時代末期から大正時代にかけて、南蛮文学や美術など多方面の分野で「南蛮ブーム」と言える現象が起き、多くの人々が長崎を訪れている。⁵⁰ 文学では所謂「五足の靴」（与謝野鉄幹、北原白秋、吉井勇、木下杢太郎、平野万里）が長崎や島原、天草を含む九州旅行を行い、南蛮趣味の詩を制作しており、これが南蛮文学の始まりとされる。⁵¹ 長崎での代表的な題材は、繁栄、禁教、潜伏そして復活という特異な歴史を辿ったキリスト教の歴史が知られる。このような長崎を題材に創作を行う場合、長崎人が中央で活動する文学者の協力者となる事例は多い。長崎人が執筆の上で知識や資料の提供、在留中の案内、時には宿泊の便宜を図ることもあった。例えば、大正・昭和期の長崎の実業家永見徳太郎は、来崎した文人・画家の世話をしていたこと知られる。⁵² 彼は、シンガポールやマレー半島に

おける貿易業やゴム園の経営を行う傍ら、芸術に関心を寄せ、自身も絵画や小説、戯曲作品を制作し、美術品や骨とう品の収集を行った。永見の交友関係としては、芥川龍之介、菊池寛、吉井勇、谷崎潤一郎、斎藤茂吉などが知られる。特に芥川は菊池と共に永見家に滞在した長崎旅行が「切支丹物」と呼ばれる彼の一連の作品に影響を与えたとされる。⁵³

戦後も多くの文学者が長崎を訪れており、資料調査のため前述の長崎県立長崎図書館に足を運んでいる。『戦艦武蔵』で知られる歴史小説家の吉村昭は随筆の中で、小説を書くために資料収集や現地踏査で旅行することが多いとし、昭和四一年（一九六六）春までに七五回長崎を訪れたという。⁵⁴ 吉村の取材を手助けしたのは、長崎県立長崎図書館職員の永島正一であった。⁵⁵ 同じく歴史小説家の司馬遼太郎も永島の協力を受けており、『竜馬がゆく』執筆のために長崎取材した際に永島は司馬を亀山社中の建物へ案内している。⁵⁶ 長崎県立長崎図書館は、貴重な歴史資料を収蔵していたことから、ここから得られた知識を職員が広く還元するレファレンス機能が充実し、文学者の問い合わせにも対応できたと考えられる。⁵⁷

以上から、大正期頃から始まる南蛮趣味、南蛮文学の流行により文学者が長崎を題材に多数の作品を描き、更に戦後には長崎の歴史を背景とした歴史小説の執筆などで当地を訪れていたことがわかった。清水が少年時代を長崎で過ごした時期と南蛮文学が盛んであった時期は一致している。長崎の異国情緒が再認識される中で、清水は長崎という町が他都市とは異なる個性を持ち、創作において評価される題材であることを認識していたのではないだろうか。また、このような文学者たちに資料を提供し、町を案内するなど制作の手伝いをする個人や組織が長崎の中にあり、このことが長崎を題材と

した作品を多く生み出す手助けをしていた。清水もまた長崎県立長崎図書館で写真を大量に複製して資料としており、永島にも取材を行っている。更に、長崎の友人による資料提供や年中行事への案内、説明を受けており、三回の個展もこの長崎のスキームに当てはまっているとと言えるだろう。他方、商業学校の同級生という、よりローカルな繋がりが清水の個展を支えた点は、長崎市出身者であったゆえの特徴的な事例と言える。

（二）絵物語から見える長崎の歴史に対する関心

前節では、長崎という土地が文学者の創作の題材として知られていたことを指摘した。このことを踏まえ、本節では清水が三回の個展以前に当地を描いた作品を取り上げ、長崎に対する関心の所在を検討する。まず、清水が長崎について描いた作品を「表2」のとおりまとめた。表を見ると長崎の歴史を題材とした絵物語形式の作品が複数見られる。昭和三〇年に清水は横山泰三との対談の中で「将来は時代もの、マゲものを試してみたいなどと考えてるよ。」と述べており、歴史を題材にした作品制作に意

No	先品名	掲載誌	連載回数	掲載期間	内容(種別1)	内容(種別2)	内容(種別3)
1	雲のコン吉	少年少女漫画集第一集	／	昭和28年10月25日	絵物語	自伝	少年期の思い出
2	新繪本太閤記	中央公論	16回	昭和28年1月～昭和30年2月	絵物語	偉人伝	長崎開港、キリスト教
3	加寿天羅甚左	中央公論	11回	昭和35年1月～12月	絵物語	偉人伝	東京文明堂創立者の伝記
4	長崎太平記	長崎新聞夕刊	343回	昭和36年11月1日～昭和37年12月29日	絵物語	長崎の歴史	長崎開港、キリスト教
5	長崎遊女無駄話	新週刊	8回	昭和36年5月11日～昭和37年6月28日	絵物語	長崎の歴史	丸山遊女
6	妙な芝居	人物往来歴史読本	15回	昭和39年8月30日～昭和41年5月10日	絵物語	長崎の歴史	長崎開港、キリスト教

【表2】長崎が登場する作品一覧



【図9】清水崑『新繪本太平記』昭和34年、垂水書房、235頁



【図10】清水崑「長崎太平記」174話、長崎新聞夕刊、昭和37年6月2日、1面

欲を示している。⁵⁸ 表の大人向けの絵物語の中で、長崎開港の歴史を題材としている「新繪本太閤記」「長崎太平記」について見ていきたい。

「新繪本太閤記」は昭和二八年発行の『中央公論』一月号から連載が開始されており、江戸時代中期に書かれた読本で豊臣秀吉の生涯を描いた『繪本太閤記』を基とした絵物語である。本作は、資料提供、時代考証を東京大学史料編纂所勤務及び國學院大學、大正大学で教授を務めた高柳光寿が担当する力の入った連載であった。高柳のはしがきによると毎月清水と高柳で座談会を行い、この時の筆記を参考に文と絵を清水が執筆しており、高柳は「この清水君の新繪本太閤記は漫画ではあるが、内容は忠實に史實に據つてゐる。」とお墨付きを与えている。⁵⁹ また、本作は歴史小説で著名な尾崎士郎、中山義秀、川口松太郎に激励を受けており、歴史を題材とした作品

として周囲から期待されていたようだ。⁶⁰ 「新繪本太閤記」は概ね豊臣秀吉の出世譚、戦国時代の時代背景や武将のエピソードが中心となり、一三話から一五話までが長崎開港とキリスト教布教期の内容となつている。作中には時折、相州鎌倉の浪人で満賀流の忍術使いである「紫水紺兵衛」というキャラクターが登場し、歴史上の人物と接触するなどして各地域を偵察している。これは読みが「しみずこんべえ」となり「満賀流」の使い手という形で清水自身をキャラクター化し、作中に落とし込んだ人物と考えられる。一三話はこの紺兵衛と歴史学に精通した師匠の志良貞喬が雲に乗り長崎を訪れる。当地は秀吉が布告した禁教令で大騒ぎになっており、志良がこの状況に至るまでの日本におけるキリスト教の歴史と長崎開港について解説を行う。一四話は前回の続きで、キリスト教が栄え天正遣欧使節団をローマに派遣するまでを述べ、一五話ではキリスト教布教がポルトガル側の策略にあると秀吉が考え禁教に至ったと説明する。時代考証がついているだけに専門的な時代背景の説明が多く、文章も長い。また、漫画というより図解に近い絵もあり娯楽というよりも学習要素の強い作品という印象を受ける。本作は、第一六話で清水が執筆に音を上げる形で終了している。絵と文章に加え時代考証への気配りも負担だったようで、高柳は朝日新聞などの仕事で忙しい清水が毎月二〇枚もの絵を描くことに苦労したためと終了理由を述べている。⁶¹ しかし、この連載で学んだ長崎の歴史に関する知識は「長崎太平記」の執筆に繋がる事となる。

次に「長崎太平記」を見ていく。この絵物語は、奇術を使う夫婦のバンコとハンドがアラビアから中国、インド、西洋と珍流雲という乗り物に乗って世界を飛び回り歴史を一望する。その後、大航海時代を経て種子島の鉄砲伝来から当時日本の状況、キリスト教の布

教、そして長崎開港へと繋がっていく大人向けの絵物語である。清水と朝日新聞社は他新聞では執筆しないという契約だったが、出身地の長崎新聞ということで特別に許可を与えて連載が実現した。⁶² 本作では、「新繪本太閤記」に描かれた、鉄砲伝来以降の西洋文化との接触、貿易の開始、キリスト教の流入と布教など内容に共通しているものが多く見られ、絵についても「新繪本太閤記」と構図が近似しているものがあり、前作を参考にしていると考えられる【図9】【図10】。

次に「長崎太平記」に関する言説を見ていく。清水は執筆にあたり、次のように述べている。

私は歴史家でも小説家でもありませんから、持ち前の漫画のリーダーを自由にのびのび操って、そこにキャッチされる喜怒哀楽の中から生き生きと感得されるありとあらゆる面白さを、強心臓のぶつきら棒な画・文によって息長く随筆していこうと思いません。

本編の主人公は長崎自身背景は海国日本全体というストーリーなしのノンフィクション。⁶³

ここでは歴史家や小説家でないと断りを入れつつも作品がノンフィクションであると述べており、これは自身のキャラクターに歴史を旅させながらも史実を追っていくという意図を示していると言える。また、本作では連載中に幕合として清水が執筆の感想を書いた回がある。一〇一回で清水は次のように述べている。

つまり長崎の歴史に何ら興味も感じていなかったつい去年の初

めまでは、開港などというものは平穩にスラスラ運んだものばかり思っていました。⁶⁴

この文章から、本作を描くにあたって清水が長崎開港の歴史を学んでいることが示唆される。「新繪本太閤記」と同様に時代物執筆のためには歴史に関する資料の収集と読み解きが必要である。このことについて、清水の遺品の中に、古賀十二郎の『長崎開港史』が残されており、多数のページに傍線が引かれていることから「長崎太平記」の種本の一つとなったことが示唆される。⁶⁵ 古賀は、長崎学研究の先駆者として知られ、「長崎太平記」の中に「天下に名高い長崎史家」として登場する。双方の共通性を考察するため、まず『長崎開港史』を見ていく。

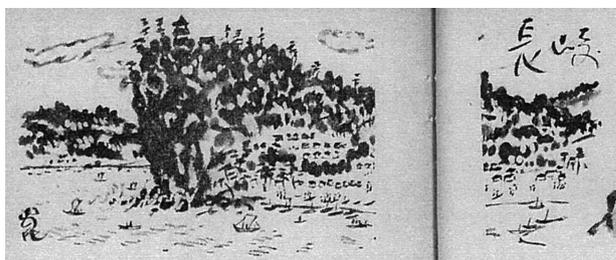
一五六九年一〇月三日附、志岐発、イルマンミゲル・バスの書翰には次の記載があります。(中略) この書翰にはNangasakuとあるのです。ナンガサキと発音すべきであります。(中略) 南蛮人が日本の地名や人名に撥音を挿入したのは、甚だ多いのです。例えばFirando (平戸) Fingo (肥後)、Fiongo (兵庫)、Asicanga (足利) Ynga (伊賀) Nobunanga (信長)、Sumitanda (純忠)、などを挙げておきます。⁶⁶

次に「長崎太平記」を見る。

(古賀) この「ナガサキ」をポルトガルの宣教師の中には、Nangasqui、ナンガサキと撥音「ン」を挿入して手紙に書いたのがあります。



【図11】清水崑『長崎太平記』339話、長崎新聞夕刊、昭和37年12月22日、1面



【図12】清水崑「妙な芝居」第15回、『人物往来歴史読本』、人物往来社、昭和41年

バンコーほほう、ナンガサキとね。ナンガサキ。こりやなるほど語調がようござるな。ほかにも「ン」の例は。古賀さんーある、ある。ヒラント、ヒンゴ、ヒヨンゴ、アシカンガ、インガ、ノブナンガ、スミタンダ。バンコーそりやなんのことでござるな、コンガ先生。古賀さんー平戸、肥後、兵庫、足利、伊賀、信長、純忠。⁶⁷（「古賀ー」は筆者が付したものである。）

長崎の地名の根拠について、『長崎開港史』の記述が「長崎太平記」に採用されていることがわかる。また、清水所蔵の『長崎開港史』の引用部分には丸括弧がつけられ強調されている。同作品の三三三

話から三四〇話は「懐かしい古老」と題され、古賀の業績の紹介と、長崎の町建ての説明、ポルトガル語から長崎の方言に変化した言語の指導をバンコとハンドが受ける内容となっている。『長崎開港史』には「(二) 長崎の町建て」「(五) 内町と外町」「(七) 長崎と云う地名」という節があり、「長崎太平記」ではこの部分を端的にまとめ古賀に語らせたと考えられる。⁶⁸更に、「長崎太平記」の二〇四話から二一七話は、秀吉の出した詰問状とこれに対するコレリヨ神父の回答が絵物語となっており、これは『長崎開港史』の「(六) 秀吉と南蛮人」と内容が近似している。⁶⁹「新繪本太閤記」を連載していた影響か、この他にも『長崎開港史』の「(六) 秀吉と南蛮人」に近似する部分が「長崎太平記」には複数見られる。このことについては、清水旧蔵の『長崎開港史』の傍線部分との比較など更なる分析が求められるがページに限りがあるため、今後の課題としたい。

以上から『長崎開港史』を清水が参考にしたと考えてよいだろう。他方、『長崎開港史』には記載されていない内容も「長崎太平記」には見られるため、参考文献は複数あったと考えられる。例えば、「イソップ物語」「日本記」という回がある。「イソップ物語」は一六世紀末から一七世紀初めのイエズス会の日本布教において日本に伝わった寓話で、日本で刊行されたキリシタン版という印刷物に含まれる。「日本記」は日本人の特徴を解説する内容などから、同時代に日本で布教活動を行ったアレクサンドロ・ヴァリニャーノの『日本巡察記』を参考にしていて考えられる。このような、通史に繋がる周辺情報を物語に差し込むことで、執筆にあたって述べた「持ち前の漫画のリーダーを自由にのびのび操って」という言葉のとおり、自身の関心に従って本作は書かれている。⁷⁰

「長崎太平記」は昭和三八年（一九六三）一月二十九日まで連載

された後、文章と絵を描く作業量が苦しく、また、清水の資料調査と集積の必要性があるために一時休止となり再開することはなかった。⁷¹

「長崎太平記」は昭和四〇年に「妙な芝居」と題を改め、内容を再編集し『人物往来歴史読本』にて連載される。大まかな内容と流れは同じであるが、大きな違いは、読者を案内するハンドとバンクがいなくなり『新繪本太閤記』に登場した紫水紺兵衛が再び登場する点である。文章は重なる部分は多いもののセリフの文が地の文に落とし込まれるなど変化しており、また、絵も構図が再利用されているものの全て描き直されている【図11】【図12】。清水は「長崎太平記」の中で次の通り述べている。

天なる哉、歴史「長崎」は「一地方」どころか「全日本」どころか「地球的」ですらあります。それでますます苦勞をいたします。⁷²

この文章から、清水は長崎の歴史が日本史的なもの世界的なものであると認識しており、全国流通の歴史雑誌においても、長崎の歴史を題材とした作品が通用すると考え、長崎県民に向けて描かれていた内容を全国誌向けに手直ししたと考えられる。

筆者は、「新繪本太閤記」執筆時に時代考証の高柳光寿との座談会を行い、資料提供を受けこれを絵物語にした経験が「長崎太平記」の執筆に影響を与えたと考える。前述の南蛮文学の流行など歴史的に長崎が特殊な地域と言うことは清水も認識しており、日本や世界から長崎を見る視点が「新繪本太閤記」で培われたことで長崎を絵物語で描く構想に繋がったのではないだろうか。

	記事名	掲載誌、書籍	出版元	種別	形式	掲載年月日
1	ペーロンキャウソウ	風俗子供めぐり	博文館	年中行事	随筆	昭和16年3月20日
2	長崎の正月	小説公園	六興出版社	年中行事	随筆	昭和26年1月1日
3	祖母	筆をかついで	創元社	自伝	随筆	昭和27年1月30日
4	長崎風譚	筆をかついで	創元社	年中行事	随筆	昭和27年1月30日
5	美人風土記 長崎	週刊朝日・春季増刊	朝日新聞社	長崎の人柄	随筆	昭和28年3月1日
6	風来坊	週刊朝日・春季増刊	朝日新聞社	自伝	随筆	昭和28年12月1日
7	風来坊 崑	週刊朝日・春季増刊	朝日新聞社	自伝	随筆	昭和29年3月1日
8	清水崑	母を語る	教育弘報社	自伝	随筆	昭和29年5月5日
9	カメラ旅 長崎	主婦の友	主婦の友社	長崎の観光地	随筆	昭和29年8月1日
10	ペーロン	朝日新聞	朝日新聞社	年中行事	随筆	昭和32年6月23日
11	希望対談お国自慢 長崎の巻	週刊公論	中央公論社	長崎の人柄、 年中行事	対談	昭和34年12月15日
12	ぼくの中学時代のお正月	中学生の友一年 1月号	小学館	年中行事	随筆	昭和37年1月1日
13	長崎の行事	太陽 no.9	平凡社	年中行事	随筆	昭和39年2月12日
14	我が故郷	小説新潮	新潮社	長崎の人柄	随筆	昭和40年11月1日
15	長崎のキリシタン	機関誌「雲」第十号	現代演劇協会	キリスト教	随筆	昭和41年5月13日
16	随筆 春の音 ヴーンポクポク	音楽の友 4月号	音楽之友社	年中行事	随筆	昭和44年4月1日
17	ふるさと今昔 長崎	朝日新聞	朝日新聞社	自伝、年中行事	随筆	昭和48年7月22日

【表3】清水崑の長崎に関する言説一覧

(三) 長崎での少年時代と年中行事

前節では、清水の執筆した作品から、長崎の歴史を絵物語化するに至る流れを分析した。本節では、長崎に関する清水の言説を考察することで作品分析とは異なる視点で長崎への関心を明らかにする。

先に結論を述べると、清水の長崎に関する随筆は、少年時代を振り返って書かれたものが多く、【表3】の内一四点はこのような形式となっている。この内、年中行事について概要と共に少年時代の経験を書いたものが九点ある。昭和三九年（一九六四）発行の『太陽』No.9に掲載された「長崎の行事」という随筆はハタ揚げ、ペーロン、盆と精霊流し、くんちの竜踊りと長崎の代表的な年中行事を網羅した随筆である。この中から長崎くんちの竜踊りの文章を見ていく。

私は、少年時代のこの龍（じゃ）踊りが、金の玉を追いながら猛然と土ぼこりを巻きあげ巻きあげ、真正面から追ってくるのを初めて見たときは、今にも自分が金の玉の代わりにのまれてしまふのではないかと身ぶるえしたことを、はっきりおぼえている。子どもの時分の感覚では、この竜（大蛇）の姿が非常に大きく目についた。

大人になってから久しぶりに見物したとき、このくらいのものであったかと少々意外感を催したが、しかしこれがチャルメラやシンバルのけたたましい音色を伴奏に踊り狂い始めると、言いようない壯観を呈する。⁷³

ここでは、少年時代に見た龍の迫力と恐ろしさが大人になるそう感じなくなったものの、音楽と共に踊る龍の姿は壯観である、とい

う内容になっている。この言説と同様に他の年中行事の文章も少年時代の経験を振り返った文章となっている。その他に【表3】にある「ペーロンキャウソウ」「長崎の正月」⁷⁴「随筆 春の音 ヴゥーンポクポク」「ペーロン」も少年時代の年中行事の経験を元にした文章である。これを念頭に、三回の個展について考えると、清水が年中行事を題材に選んだのは、長崎人に喜ばれる題材であったと同時に、自身の少年時代の思い出に根差した印象深いテーマであったためと考えてよいだろう。

このような長崎での少年期の記憶が仕事に影響した事例は他にも見られる。前述のとおり、「新繪本太閤記」「長崎太平記」は長崎開港の歴史を描いており、この中でキリスト教の日本布教から繁栄、禁教、潜伏に至るまでの内容が含まれる。清水の少年時代に関する言説の中に、キリスト教との接触について次のように語っているものがある。

乱後四年目に平戸のオランダ商館が長崎に移され、オランダ人と中国人だけが長崎一港で貿易が許されるようになった「鎖国」以来ずっと私の少年時代まで三百余間、キリシタンに対する長崎の仏教徒の感覚や態度もあまり変わってはいなかったんじゃないかという気がします。明治に入ってキリスト教の信仰は自由になりましたが、それから五十年経った大正七、八年ごろ、小学生時代の私の家（浦上寄りの銭座と言ったところにありました）から少し外れた山裾の段々畑の一割に貧寒と群棲していたキリシタン部落の少年が、たまに使いに町へ下りて来るのを見つけると、近所の仲間みんなして「ヤソ、クロ、十字架、くるっと回って鶏の糞」

遠まきにはやし立ててはその時々少年に小石を幾つも投げつけたものです。(中略)それが子供心にはいかにもドス黒く不透明な、みじめで垢まみれの世にも薄気味悪い異種族として映っていました。⁷⁵

清水の生まれ育った錢座町は江戸時代に潜伏キリシタンの集落があった浦上村の隣に位置していた。この文章からは、大正期に浦上村周辺に住む住民にとって、キリスト教徒が異質であるという認識が拭いきれなかったことが示唆される。このキリスト教徒に関する接触と抱いた異質なものという感情が後に日本のキリスト教の歴史に関する作品を清水に描かせたと考えてよいだろう。このことは、年中行事同様に長崎での少年時代の経験が後の清水の創作に影響を与えた一例であると考ええる。

以上から、清水は長崎に関する言説の中で、少年時代の経験として年中行事やキリスト教との接触について言説を残していたことがわかった。長崎に関する言説で度々年中行事を取り上げたのは、清水にとってこの土地を語る上で、重要な記憶であったためと考えられる。同様に、三回の個展で年中行事を題材としたのも、少年時代の印象深い思い出を描こうとしたためと考えられる。他方、少年時代のキリスト教との接触は「新繪本太閤記」「長崎太平記」執筆に影響を与えていた。このように、長崎で過ごした少年時代の記憶は複数の作品に反映された可能性があり、このことについては更なる調査が必要である。

おわりに

本稿では、まず長崎市が令和四年から取り組んでいる清水崑マンガ原画等資料に関する調査を基に、清水崑展示館の所蔵する資料群の紹介を行った。長崎市所蔵資料は、『かっぱ川太郎』『かっぱ天国』『朝日新聞掲載資料』という代表的な作品の原画を収蔵する点で特徴的である。更に、清水が長崎の年中行事を描いた絵画や屏風などの美術資料も収蔵しており、これらを長崎関連資料として制作の背景について清水の日記や文献資料などから分析した。このことにより、長崎市所蔵資料を通して、長崎の歴史や文化が清水の創作活動に影響を与え、晩年には長崎の文化に残る作品を制作することを意図したことを明らかにした。本作品群は、昭和四六年から四七年にかけて長崎で開催された長崎の年中行事に関する三回の個展で制作されたものである。一九歳で上京して以降、活動の中心が東京であった清水が、長崎で個展を開催し、細かな考証が成された年中行事の絵を描けたのは、商業学校の友人たちの協力が大きい。また、長崎は大正期頃から南蛮文学に書かれ、戦後は歴史小説などの執筆で文学者が訪れた場所であった。このような中央の芸術家に対し、土地の案内や資料の提供を行う個人や組織が長崎側にはあった。清水もまた他の芸術家と同じように長崎県立長崎図書館で資料収集を行い、郷土史家や長崎くんちの関係者に取材を行っており、これは他の芸術家同様に長崎作品を描くスキームに当てはまっている。他方、商業学校の同級生が清水の個展を支えた点は、長崎市出身者であったゆえの特徴的な事例と言える。

清水が長崎で開催した三回の個展を日記から読み解くと長崎の文化に作品を残すという意図があったことがわかる。このことを踏ま

え、清水が長崎にどのような思いを持っていたかを検討するため、長崎を題材に描いた作品を分析した。清水の作品には歴史を題材にして描いたものが複数あり、長崎開港の時期を描いているものが二作品見られる。「新繪本太閤記」は、主に豊臣秀吉の出世譚や戦国時代を描いているが、一部、長崎開港とキリスト教の繁栄から弾圧までを題材としている。本作は、戦国時代研究の権威である高柳光寿による時代考証が入っており、清水は座談会や資料提供を受けている。このことは、歴史物を描く上で基礎を身に着ける機会になったと考えられる。もう一作品の「長崎太平記」は古賀十二郎の『長崎開港史』が種本の一つになったと考えられ、古賀自身が作中に登場し『長崎開港史』に記載のある長崎の町建てや長崎の名前の由来について語っている。この作品で清水は、長崎は一地方どころか全日本、それどころか地球的であると述べ、長崎の歴史の広がりを感じていた。前述のとおり、多くの芸術家が長崎に惹かれたのは、南蛮趣味、日本史的な広がりがあったためであるが、清水もまた長崎のこのような側面に魅力を感じたと考えられる。他方、清水は長崎出身者で一九歳までを当地で過ごしており、長崎について書かれた言説を見ると、少年期の思い出の中で年中行事を取り上げたものが複数見られる。晩年実施した三回の個展のテーマに年中行事を取り上げたのは、長崎の代表的な題材であると同時に清水にとって長崎という場と少年期に経験した年中行事の記憶が繋がっていたためだと考えられる。同様に、少年期にキリスト教の多い浦上村の隣町に住んでいた記憶は、長崎のキリスト教の歴史を描いた作品に影響を与えていた可能性がある。以上から、少年期の長崎での記憶が後年の制作活動に影響を与えたことが推察された。

長崎と清水の繋がりについては、作品への影響について更なる検

討の余地があると考えられる。また、清水を初め昭和期に活躍した大人漫画家の研究は途上にあると言える。この中で、清水の代表作であるかっぱ漫画や朝日新聞関連漫画などの分析を行うことで、漫画家としての独自性や時代に与えた影響を明らかにできると考える。また、個人研究の枠を超えて他の漫画集団団員をはじめとした、同年代の漫画家との比較や交友の深かった文化人達とのネットワークの広がりを明らかにするなど様々な角度から分析することで漫画史及び昭和期の文化史の一端を明らかにすることも繋がると考えられる。以上から、引き続き、長崎市収蔵資料を基礎として清水の業績の全貌を明らかにしていきたい。

最後に、長崎の文化に残る作品を制作するという清水の意図は、一定果たされたことを記したい。三回の個展で購入された作品は、現在、長崎の店舗や長崎くんちの庭見せに展示されているものを見ることが出来る。また、昭和五七年におこった長崎大水害を忘れないよう、清水の死後の平成四年（一九九二）に「かっぱのぼんたくん」の像が中島川公園に建立された。更に、出身校である長崎市立銭座小学校には、清水の「なかよし かっぱふうちゃんたちあちゃん」の漫画を基に作られた壁画がある⁷⁶。平成一三年一月一日には、清水の遺族から寄贈された原画等資料を広く公開するため「清水崑展 示館」が開館している。以上から、清水が三回の個展で述べた「長崎の文化に残る作品」という目標は達成できたとと言えるだろう。

（長崎市長崎学研究所主事）

- ¹ 清水崑『かつば天国』第一集、東峰書房、昭和三〇年、四～五頁。
- ² 高橋浩一郎「放送研究レポート」テレビアニメの源流を探る『放送研究と調査』六八巻一〇号、NHK放送文化研究所、平成三〇年。
- 日本映画社、一九四八年、「日本ニュース戦後編第一一六号」、NHKアーカイブス（二〇二二年一月一九日取得、https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0001310116_00000）
- ³ 佐藤忠男「風流の世界―作家と作品―」『第二期・現代漫画二 清水崑集』筑摩書房、昭和四六年、三〇七～三一六頁。尾崎秀樹「解説―かつばに託した人間戯画―」『かつば天国』小学館文庫、昭和五二年、一八四～一八七頁。須山計一「清水崑」『日本の戯画 風刺と抵抗の精神』、社会思想研究出版部、昭和三五年、一八六～一八七頁。須山計一『日本漫画百年』昭和四三年、芳賀書店、一五〇頁、一七八頁、一八四頁。飯沢匡「お色気漫画の白眉 清水崑」『現代漫画家列伝』、昭和五三年、創樹社、一三四～一四六頁。
- ⁴ 石子順「政治漫画の季節」『日本漫画史』、昭和六三年、社会思想社、二二二～二二二頁。石子順「かつば川太郎」『戦後漫画の主人公たち』平成元年、草の根出版会、三〇～三二頁。石子順三「戦中漫画の精神構造」『現代漫画の思想』昭和四五年、二二六頁。石子順三「昭和二〇年代」『戦後マンガ史ノート』平成六年、紀伊国屋書店、五一頁。清水勲『漫画の歴史』平成三年、岩波新書、一三〇、一五八、一八一、一八二、一九六頁。峯島正行「漫画集団とその抵抗勢力」『現代漫画の五〇年―漫画家プライベート史―』、昭和四五年、青也書店、三六～四一頁。
- ⁵ 阿野露団「現代漫画界の芸術派 長崎 清水崑」『長崎の肖像―長崎派の美術家列伝―』平成七年、形文社、三九八～四〇八頁。前掲注2。
- ⁶ 清水崑『筆をかついで』、昭和二六年、創元社、一九二頁。
- ⁷ 清水崑「虚しさの中の右往左往」『続・わが青春放浪記』昭和三年、春陽堂書店、一八～二三頁。
- ⁸ 火野葦平（一九〇七～一九六〇）昭和期の小説家。『糞尿譚』で芥川賞を戦地で受賞、その後も『麦と兵隊』などが評価されていた。清水とは戦後も交友を持つ。
- ⁹ 前掲注1、二一五頁。
- ¹⁰ 昭和三〇年代に書生をしていた林家木久扇氏は清水家に川端康成や大佛次郎、小林秀雄など昭和の文壇で活躍する文学者や評論家が清水家に入りしていたと述べている。（林家木久扇『木久扇チャンバラ大好き人生』、令和二年、ワイズ出版、三〇一～三〇四頁。）
- ¹¹ 『読売新聞夕刊』昭和一八年一〇月一五日、二面。
- ¹² 前掲注7、四一～四二頁。
- ¹³ 横山隆一『フクちゃん随筆』昭和三〇年、四季社、一〇一頁。
- ¹⁴ 管見の限り清水の朝日新聞掲載は昭和二二年一月三〇日が初発である。昭和二四年一月一日の『朝日新聞夕刊』発刊の際には、「既に定評ある清水崑氏が連日一面に風刺漫画を執筆」と四コマ漫画を担当した長谷川町子と共に紹介されており、清水が朝日新聞の政治漫画家として定着していったことがわかる。これ以降、『朝日新聞朝刊』『朝日新聞夕刊』共に清水が漫画を掲載している。

16 清水は横山泰三との対談で、政治漫画について「少しはかいてくれるけど、もともと性に合わないんだね。誰か代わってくれる人が現れたら、いつでもやめようと思ってたところに泰ちゃんがあらわれたからもう安心だ。(笑)」と語っている。このことから、昭和三〇年頃には政治漫画の仕事を意識して減らしていたことがわかる。(清水崑、横山泰三「対談 その道」第十回、『週刊サンケイ』昭和三〇年、扶桑社、六一頁)

17 前掲注2、一〇四頁。

18 長崎市「清水崑漫画原画等資料目録公開」(令和五年一月二八日取得、<https://www.city.nagasaki.jp/syokai/720000/724000/p0401001.html>)

19 前掲注2、一〇四～一〇五頁。

20 『三年の学習 夏休み特別号⑨』昭和四四年、株式会社学習研究社。

21 田中直一は、長崎市浜町にタナカヤという衣料品店を経営していた。元は明治一〇年に舶来雑貨小間物小売業として創業した長崎の老舗である。

22 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S46.4.25～8.31」、昭和四六年五月一二日、資料番号05007739。

23 前掲注22、昭和四六年六月二四日。

24 谷口正行は、長崎市内で谷口文行堂という文具屋を経営していた。書家、洋画家としての顔も持ち、長崎の年中行事や文化への造詣も深い人物で昭和六一年に賑町が初奉納した「恵比須船」の考証と指導を行っている。(本馬貞夫『長崎くんちの奉納踊りの歴史と経済的社会的効果・効用』令和四年、四五頁。)

25 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.2.1～3.14」、昭和四七年二月六日、資料番号05007742。

26 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.3.17～4.5」、昭和四七年三月一七日、資料番号05007743。

27 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.4.6～4.29」、昭和四七年四月八日、資料番号05007744。

28 前掲注27、昭和四七年四月二九日。

29 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.1.1～1.31」、昭和四七年一月七日、一月一日、資料番号05007741。

30 前掲注29、一月一二日。田中直一と遠藤は、田中の娘英子が長崎滞在中の遠藤と三浦朱門から三浦の妻曾我綾子の土産物を選ぶ手伝いを頼まれた際に知り合い、これが縁で家族ぐるみで付き合うようになった。英子は、遠藤の依頼に応じ、転び証文やフェレイラの墓を探し、結果を書簡で報告しており、遠藤にとっての長崎取材の協力者であったと言える。(遠藤周作「日記(フェレイラの影を求めて)」『切支丹の里』、人文書院、昭和四六年。遠藤周作文学館『第七回企画展 遠藤周作と長崎―心の鍵が合う街―』、平成二四年、遠藤周作文学館、一七頁。)

31 前掲注27、昭和四七年四月二六日。

32 『長崎新聞』昭和四七年五月一〇日、二面。

33 「清水崑画伯の個展」『夕刊フジ』、昭和四七年五月一四日、一面。

34 当初、開催場所は引き続きタナカヤギャラリーを予定していたが店舗改装のため変更となった。田中は職員を配置し、引き続き協力を約束している。

³⁵ 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.5.10～5.31」 昭和四七年五月一九日、資料番号 05007745。

³⁶ 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.8.18～9.13」 昭和四七年八月三〇日、資料番号 05007749。

³⁷ 『長崎新聞夕刊』昭和四七年一〇月六日、二面。

³⁸ 『長崎新聞夕刊』昭和四七年一〇月八日、五面。

³⁹ 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S48.7.16～」 昭和四八年八月五日、資料番号 05007756。

⁴⁰ 『長崎新聞』昭和四九年一〇月七日、五面。

⁴¹ 前掲注22、昭和四六年五月一二日。

⁴² 東京都江戸東京博物館収蔵「日誌S47.9.14～10.30」 昭和四八年一〇月二〇日、資料番号 05007750。

⁴³ 前掲注42、昭和四八年一〇月二〇日。

⁴⁴ 『長崎新聞』昭和四七年五月三日、二面。

⁴⁵ 文学者同様画家たちも長崎を題材に多くの作品を描いている。明治三二年（一八九九）から終戦まで長崎は、要塞都市であったことから風景を描くことが難しく、特に作品が多く描かれるようになったのは戦後の事と考えられる。洋館や赤寺など歴史に根差した異国情緒ある景観が風景画を描く洋画家を惹きつけ、昭和二〇年代から三〇年代にかけて長崎は絵になる写生地として中央画壇でも知られることとなる。本稿では、資料収集や調査などを行う点で清水の制作活動と文学者に共通点を認めたため、画家については往來の事実のみを記すこととした。

⁴⁶ 長崎県立長崎図書館郷土資料センター、「文学年表」、(二〇二三年 一 一月 二六日 取得、<https://nagasaki-lmc.jp/top/local/>)

literature/chronology/)

⁴⁷ 長崎県立長崎図書館郷土資料センター、「来館者芳名録」、(二〇二三年 一 一月 二六日 取得、<https://nagasaki-lmc.jp/top/local/name/>)

⁴⁸ 長崎新聞社編『長崎県大百科事典』、長崎新聞社、昭和五九年、六五一頁。

⁴⁹ 前掲注48、一頁。

⁵⁰ 長崎県美術館編『浪漫の光芒 永見徳太郎と長崎の近代』令和五年、長崎県美術館、一〇七頁。

⁵¹ 國生雅子「五足の靴解題―南蛮文学の誕生―」『五足の靴百年―南蛮文学の誕生とその広がり―』、平成一九年、野田宇太郎文学資料館、四～五頁。

⁵² 前掲注50、一三頁。

⁵³ 大谷利彦『長崎南蛮余情 永見徳太郎の生涯』長崎文献社、昭和六三年、二五〇～二五二頁。

⁵⁴ 吉村昭『七十五度目の長崎行き』、平成二一年、河出書房新社、九八頁。

⁵⁵ 永島正一（一九一二～一九八七）は、長崎県立長崎図書館館長で同館に三八年勤めた。長崎の郷土史家として知られる。昭和二八年のNBC長崎放送開局以来、ラジオで郷土史を語る「長崎ものしり手帳」を担当し、放送回数は一万回に及んだ。永島の功績の一つはそれまで研究者が研究課題とした長崎学を一般に広めたことと郷土史家の越中哲也は述べている。（越中哲也「永島正一先生のこと」『長崎学人物誌』平成六年、長崎純心大学博物館、一九七～二〇〇頁。）

56 司馬遼太郎『竜馬がゆく』八、一九九八年、文芸春秋社、四〇六
〜四一〇頁。

57 永島の在籍した長崎県立長崎図書館は、長崎を往来した文学者が
調査を行ったと同時に、長崎の文学研究においても、重要な場所
と言える。

58 前掲注16、六二頁。

59 高柳光壽「はしがき」『新繪本太閤記』、垂水書房、昭和三四年、
四頁。

60 清水崑「あとがき」『新繪本太閤記』、垂水書房、昭和三四年、
二六一頁。

61 前掲注59、四頁。

62 『長崎新聞夕刊』昭和三六年一〇月一六日一面。

63 前掲注62。

64 『長崎新聞夕刊』昭和三七年三月五日、一面。

65 東京都江戸東京博物館収蔵、古賀十二郎『長崎開港史』、資料番
号06600189。

66 古賀十二郎『長崎開港史』、古賀十二郎翁遺稿刊行会、昭和三二年、
一八〇頁。

67 清水崑「長崎太平記三三九 懐かしい古老⑦」『長崎新聞夕刊』、
昭和三七年一月二二日、一面。

68 清水崑「長崎太平記三三三 懐かしい古老①」『長崎新聞夕刊』、
昭和三七年一月四日、一面。

清水崑「長崎太平記三三五 懐かしい古老③」『長崎新聞夕刊』、
昭和三七年一月一七日、一面。

前掲注67。

清水崑「長崎太平記三四〇 懐かしい古老⑧」『長崎新聞夕刊』、
昭和三七年一月二四日、一面。

前掲注66、一二〜四五頁。

前掲注66、一七七〜二〇〇頁。

69 前掲注66、一一五〜一一八頁。

清水崑「長崎太平記二〇八 落雷⑤」『長崎新聞夕刊』、昭和三七
年七月一七日、一面。

70 前掲注62。

71 『長崎新聞』昭和三八年一月二日、一面。

72 『長崎新聞』昭和三六年二月二四日、一面。

73 清水崑「長崎の行事」『太陽』No.9、平凡社、昭和三九年、五四
〜六一頁。

74 なお、「長崎の行事」の記事で精霊流しについては、全文子供向
け絵物語の「雲のコン吉」からの引用となっている。「雲のコン吉」
は自身の少年時代の思い出を描いた作品であり、この中で年中行
事の経験として鼠島での遠泳教室、盆と精霊流しに触れている。

（清水崑「雲のコン吉」、『青少年少女漫画集』第一集、河出書房、
昭和二八年、四〜二四頁。）

75 清水崑「長崎のキリシタン」『現代演劇協会機関誌一〇 雲 特
集黄金の国』、昭和四一年、現代演劇協会、二二〜二三頁。

76 錢座小学校の壁画は、昭和三三年八月一日発行の『幼稚園八月号』
に掲載された「なかよしかっぱのふうちゃんたち」を編集
したものが採用されている。

【図版典拠】

- 図1～8…長崎市清水崑展示館提供
- 図9…清水崑『新繪本太閤記』（昭和三四年、垂水書房）より転載。
- 図10…『長崎新聞夕刊』、昭和三七年六月二日、一面より転載。
- 図11…『長崎新聞夕刊』、昭和三七年二月二二日、一面より転載。
- 図12…清水崑「妙な芝居」第一五回『人物往来歴史読本』（人物往来社、昭和四一年四月一〇日）より転載。

〔付記〕

本稿執筆にあたり、長崎県文化振興・世界遺産課の本馬貞夫先生（長崎学アドバイザー）、石尾和貴主事より執筆に関するご指導及びご助言いただきました。清水崑ご遺族の清水梢太郎様、定成淡紅子様並びに両ご家族の皆様、清水崑の書生で落語家の林家木久扇師匠、NPO法人長崎史談会大田由紀理事、長崎市文化観光部文化財課倉田法子学芸員、東京都江戸東京博物館様にご高配を賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本研究は、令和四年及び五年度文化芸術振興費補助金メディア芸術アーカイブ推進支援事業の助成を受けたものです。なお、同補助事業の成果である長崎市所蔵清水崑マンガ原画等資料目録を長崎市長崎学研究所HPにて公開しています。